
KAZOM ~カゾム~

JUNPEI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

KAZOM〜カゾム〜

【Nコード】

N9505J

【作者名】

JUNPEI

【あらすじ】

《家族》それはかけがえのないもの。

それを失うのはあまりにも悲しい。

家族とは血の繋がった人だけなのだろうか？単位を大きくすれば皆家族だろうか？

例えば町、部活、学校、そして友達。

世界は、大きな家族なんだ…

第一話 新天地

『…あなたは、自分自身のことが好きですか？
あ、変な意味じゃないですよ？』

私は…大嫌いです。

だって、私は傷だらけで汚れてますから。

…心も身体も。

それでも…それでも！！

……………それでも、私を認めてくれますか？』

誰だ？優しい声をしている…でも俺はこの声の主を知らない。

そうか、夢の中なんだな。どうせ見るならもっと楽しいのがいい。
真っ白い空間だけに声だけが響いているなんて面白くもないじゃないか。

…でも、この女の子の（と仮定できる）声は聞いていたい…何か
安心できる。

「……………くん。…んくうん」

ん？違う声が聞こえてきたぞ？俺を呼んでいるのか？

「起きてえ。じんくうん」

「…あ、かあさん。どうしたの？」

俺はかあさんの声で目が覚めた。どうやらかあさんは結構前から
俺のことを呼んでいたらしく、若干むくれている。

「どうしたのじゃないよお。…ほらあ、着いたよお。新しいお・う・

ち
「

ああ、そうだ。今日は引越したんだ。どうやら途中車の中で寝てしまったみたいだな。

寝起きの頭は働かない。

俺は盃陣矢。さかすきしんや中3。いや、来週から高1だ。とおさんが新しい仕事に就いたのでここ、<阿弥町>に引越してきたのだが、県をいくつも越えた先だから当然友達もいない。本当にゼロから高校生活をスタートすることになった。

だからといって別におさんを恨んだりとかはしていない。どちらかと言うといい機会だと思う。新天地でゼロからスタート。不安も多いがその分期待も大きいってものだ。

そう言うわけで引越してきたのだが…途中車内で寝てしまったらしい。しかしさっきの夢は一体？

「ほおらあ。ぼんやりしてないでよお、早く荷物を運んでえ」

先程のむくれた顔はそのままに俺の身体を揺すって急かすこの人が俺のかあさんだ。名前は未来^{みく}。

現在35歳なのだが全然年齢を感じさせない。友達にはよくくお姉さん？>って聞かれる。

…まあ、外見だけでなくこのほわ〜んとした口調のせいでもあるのだが。

再婚とか後妻というわけでもない。

「うん、わかったよ。あれ？とおさんは？」

「かずくんならご近所にパンを配りに行ったよお。そろそろ帰ってくると思っただけだよ…あ、ほらほらあ。帰って来たよお。かずくん」

かあさんが嬉しそうに大きく手を振る先には俺のおさんが顔に

笑みを浮かべて歩いている。

「おう、ただいま。未来！！おお、陣起きたか」

「うん。おはよう」

「おらおら、さっさと荷物を家の中に入れるぞ！！」

この人が俺のおさん。名前は一樹^{かずき}。

かあさんと同い年でかあさん同様年齢を感じさせない。そしてかあさん同様子供っぽい性格。両親共に子供っぽい性格なのだが、その性格が逆にウケて引越す前の場所では近所での評判はかなりよかつた。

たぶんここでも同じ結果になるだろう。

ちなみにおさんの今の仕事はパン屋だ。前は都会のそれなりに大きなホテルでコックをやっていたのだが、ああ言う性格なので客と面と向かって食べ物を売る仕事がしたかつたらしい。

パン屋にした理由はおさんの最も得意な料理がパンであったのと、かあさんが

「パンなら私にも焼けるよお。そしたらかずくと一緒に仕事できるねっ」

と言ったからである。

2人の腕前なのだが、とおさんのパンはさつき述べた理由によりかなり美味しい。

一方かあさんは…パン以外だったらとおさんよりも美味しいのだが、パンだけは余計な工夫をするのではつきり言って不味い。要するに“余計なこと”さえしなければ美味しいのだ。

だが、これを言うと泣いてしまうので言わないのが俺とおさんの暗黙のルールだ。だが1番かあさんを泣かせているのはとおさんだったりする。

ちなみにさつきとおさんが配りにいったパンは全てとおさんが焼

いたものだから心配は無い。

「店舗兼住居だから、ちょーっただけせまいがいい家だろ？」

「うん。そうだねえ。お店の中もカワイイもん。さすがかずくん」

誇らしげに店を見上げるとおさんと嬉しそうに店の中を回るかあさん。……俺のこと忘れてねえ？

まあ、前の町とは違って少し田舎だけど、楽しい生活になりそうだな。

そのためにはまず、荷物入れだ！！

第二話 最初の友達

朝、朝食を食べている途中でとおさんが唐突にこう言い出した。

「あーそうだ未来、陣矢。今日昼ごろに客が来るからその辺よろしく」

「客？」

「ああ俺の古い友人だ。近所に住んでるし、親睦を深めるためにも別にいいだろ？」

「わあ、かずくんのおともだち？おもてなしをしなくっちゃあ！！とりあえず私の新作パンでも……」

その瞬間俺もとおさんもドキツとする。

あの破壊力抜群なパンを食べさせるわけにはいかない！！

「ああ……いや、大丈夫だ。未来。あいつには俺の成長した腕前を披露してやらんといけないから。未来は他のを作ってくれ」

とおさん。汗だくだぞ……。しかしかあさんはそれを聞いて諦め切れそうにない顔だが、渋々と言った様子で、

「うう、せつかく新しいの考えたのに……」

「またの機会にな」

俺のとおさんはこうやって上手にかあさんのパン攻撃をかわしていくことがある。こう言うのは俺も見習わなくちゃな。

この町に引越してきて今日で二日目。今日はこの町をいろいろ見て回りたかったのだが、客なら仕方ないかな。

「陣矢。あいつには子供がいてお前と同じ年らしいから、仲良くやれ。」

「へえ。そうなの？ちようどいいや。この町を回ろうとしてたから案内してもらおうかな」

そんな会話をしながら今日の朝食は終わる。

客が来ると言うので、昨日運び入れただけの荷物を整頓しなければならぬ…のだが、掃除がキライなおさんは、

「息子よ！！後はお前にまかせた！！バイビー」

と言って遊びに出掛けやがった！！

客を呼んだのアンタでしょ！？とおさん！！

…と言いつつも渋々片付けをする俺。ああ俺って孝行息子だな。

コノウラミ、ハラサデオクベカ……

3時間後

ようやく片付いた。あー疲れた……なんだろう？片付け終わったのにスッキリしないこの感覚は？

「じんくうん。終わったあ？」

タイミングよくかあさんが現れた。

って言うかかあさんもいなかったよな。そうか。スッキリしないと思っただけはこれか！？

片付けを息子1人にやらせるってなんなんだ。

かあさんはさすがに悪いと思っただのか、ばつの悪そうに謝る。

「ごめんねえ。ほんとうは手伝いたかったんだよお？
でもお、かずくんがゲームセンターで楽しそうに遊んでるからつい
…ごめんね？」

「そこで誘惑に負けないでほしいんですけどねえ!？」

両親がゲーセンで遊んでいる時に俺は一人で片付けをしていたと
言うのか？

悲しいな、オイ。

って言うが無駄にハートを飛ばさないで欲しい。

「今かずくんがおともだちを呼びに行ったよお。だからその前に準備しちやおうね」

「うん。じゃあ食器出すよ」

テーブルの上においしそうな料理が並ぶ。朝とおさんが作ったパ
ンと今かあさんが作ったものだ。

そこにおさんととおさんの友達とその息子が入ってきた。

とおさんの友達は臺恭二と名乗った。優しそうな印象の人だ。

その息子は織人だ。父親とは違って活発な雰囲気醸し出してい
る。

お互いに自己紹介を終えたところで昼食に入る。

「いやあ、すっかり御馳走になったね。

家はすぐそこだからなにかあったらいつでも言ってね」

満足そうにそう言って恭二さんは帰って行った。織人は俺にこれ
からこの町を案内してくれる。

「じゃあ、陣矢。行くうぜ」

「ああ」

織人とは昼食の席ですっかり仲良くなり、いろんな話をした。織人は俺と同じ高校に通う。俺は中学時代バスケットをやっていたので高校でも続けるつもりで、織人も同じバスケット部に入るつもりらしい。だからウマが合ったのだろう。

「なあなあ、陣矢。未来さんってお前の姉さん？」

「いや、違うよ。俺のかあさんだ」

「ええええ！？」

予想通りのリアクションをありがとう。ってかそんな目をカッと開いた顔でこっち見るな気色悪い。

「あんなに若いのに？って言うかお前の親父さんも若いよな！？再婚続きとか？」

「いや、2人ともああ見えて35だよ。ちなみに両方ともバツ0だ。

…信じられないと思うけど」

「はつきり言っただけ信じられねえよ！！羨ましいなあ、カワイイ母親で」

「いや、実際そうでもないぞ」

「なんでさ？」

「想像してみる。年がら年中イチャイチャしてんだぞ？」

「……」

目を瞑って想像している。

織人の額に汗が出てきた。

「…それもそれでちょっとな……」

「だろ？」

その後も他愛のない会話をしながら街を回った。
今日一日でいろいろ見て回ることができた。

新しい友達もできたし、高校生活心配することはなさそうだな。
日も落ちてきたことだし、とりあえず解散することにした。と、
言っても家はすぐそばなのだが。

「ただいま」

「おかえりい。じんくん。楽しかったあ？」

満面の笑みでかあさんは迎えてくれたが……あれ？かあさん？目
の周りが赤いんですけど……

「うん。楽しかったよ。高校生活も心配なさそうだし」

「よかったねえ」

「あれ？とおさんは？」

「かずくんだったらまた遊びに行っちゃったんだよお。1人でさびし
かったのぉ」

だからか……寂しくて泣いてたんだな。そこ、笑うなよ？かあさ
んは寂しがりやなんだ。

だが、これなら堂々とおさんに報復ができるな。恐らく今俺は
とんでもなく悪そうな笑みを浮かべているのだから、家の中に入
る仕草で顔を隠す。

……かあさんに見せられる顔じゃないだろうからな。

「ああそうだ、かあさん。とおさんがねえ……」

そして30分後。とおさんが帰ってきた。

これから始まる制裁のフェスティバル！！

「ただいま!!」

「かずくん、おかえりい。はい、これ。私が焼いた新作のパンだよ。お。

いっぱい食べていいからね?」

軽く4個はパンが入っていきそうなバスケットをとおさんは渡された。

嬉しそうにバットとグローブを担いで帰ってきた(今度は野球かよ!!)とおさんの笑顔が凍りつく。

「ええ? な、なんで?」

「さつきくんがねえ、かずくんが私のパンを食べたがってることを教えてくれたんだよお?」

「じ、陣矢?」

とおさんが俺に救いの眼差しを向けてくる。もちろん俺はそっぽを向く。

これが俺の恨みの晴らし方だ。午前中のことは忘れてねえぜ?とおさん。

ちなみに今回のパンは「お茶パン」だ。健康面に重点を置いて、お茶っ葉をそのまま生地に練りこんで焼いた代物だとか。言っまでもないが不味い。

「グスツ……………食べて……………くれないのお?」

「ウツ!!」

かあさんが涙ぐみ始めた。

これはもう食べるしかないな。がんばれよ。とおさん。

「も、もちろん食べるさ。未来のパンは大好物だぜえー！ー！！
ヒヤッホウーイー！！」

額には脂汗がにじんでいる。

その後、あの不味いパンを4個すべて完食したとおさんだったが、
食後にいつもは緑茶を飲んでいるが、今日はコーヒーを飲んでいた

…

第三話 東西南北（前書き）

どうもJUNPEIです。

久々の投稿となりました。

今回の話は会話がメイン（今後もそうなる恐れが大ですが）ですの
で少々読みにくいかもしれませんが、楽しんで頂ければ嬉しいです。

第三話 東西南北

今日は阿弥高校入学式。

今は入学式を終え教室にいる。

とりあえず織人が一緒のクラスになってよかった。やっぱり知り合いが一人でも同じクラスにいたほうがいいよな。

先生が入ってきた。かなり若い男の先生だ。

「やあやあ諸君！！入学おめでとー！！」

俺がこのクラスの担任の馬場だ。よろしくな！！」

…なんか、ずいぶんとフランクな人だな。

でも飽きることは無いだろうな。こいうテンションの人は。

「早速だがみんなに自己紹介をしてもらおうかな。出席番号順で」

「せんせー！！まず先生がしてくださいーい」

織人のヤツやけに積極的だな。

「ん？俺か？…よし、いいだろう！！」

俺は馬場高士。教科は家庭科だ！！以外だろ！？そして…」

(ピンポンパーンパーン)

『馬場先生。馬場先生。校舎裏の初代校長の銅像の件について聞きたいことがあります。』

直ちに校長室まで来なさい。』

「……………」

クラス一同で先生を見る。

先生は不思議そうな顔をしている。

「…先生。何やったんですか？」

「いや、あまりにも銅像が質素だったから昨日服と帽子をデザインして着せただけなんだけどなあ…」

それ、問題アリだと思う。

先生は「テキストに自己紹介でもやってて」と言っただけで校長室に向かった。

～放課後～

「陣矢。一緒に帰ろうぜ」

早速織人が誘ってきた。…少しからかってやるか。

「…お前誰だっけ？」

「織人だよ！！3日前に会ったばかりだろ！？町を案内してやったじゃないか！？」

想像以上の反応だ。ヤッベ。楽しい。

「いや…俺が知ってる織人はそんなに笑える顔じゃ無かった」

「今君の目に映ってる僕ってどんな顔なんですかねえ！？」

「あら、織人。相変わらずやかましいわねえ」

ん？誰だ？織人の知り合いか？

「…少しは静かにしたらどうだ？お前はいつもいつもやかましすぎる」

「そうよ。それに落ち着きも無い。」

鈴を着けたら一日中鳴ってるわね絶対」

「僕はいたって静かだし落ち着いてるよ!!」

「お前が静かで落ち着いているなら俺らは死体と言っても過言では無いぞ」

「陣矢!!お前も入ってくるのかよ!?!ってかそんな言い草は無いだろ!?!」

「…アンタ、やるわねえ。なかなかいい責めっぷりよ?」

「お前もやるな」

「そこ!!意気投合するんじゃない!!」

その後名も知らない女生徒と一緒に10分程織人をイジった後、自己紹介タイムとなった。

俺と一緒に織人をイジった女生徒は北原南きたはらみなみ。キレイと言うよりもカ

ッコいい感じの活発的な印象が残る

、まあ美女だな。

織人曰く、交友関係がが広いのでいろんな人の相談役として活躍しているらしい。

あと、ファンクラブがあるとか。

もう一人の、最初にちょこっとだけ織人に突っ込みを入れたのが仁志東あずま。こっちもかなりカッコいい。だが南に比べてクールだ。

しかしまた織人曰く、突っ込むところはちゃんと突っ込むので親しみやすいとか。あと正義感がかなり強いらしい。

そして南同様ファンクラブあり。

「僕達は仲良し3人組で通ってるんだぜ!!」

「仲良し3人組?」

俺は意味ありげに3人を見比べる。

たしか南と東は成績優秀って言ってたな。

コイツ頭悪そうだしなあ、顔もそこまでじゃない。

「……………」

「何なんだよその間は!!！」

「なあ、東、南。コイツって頭の中はどうなの？」

「…はつきり言っただけかなり悪いぞ」

「後ろから数えたほうが数十倍楽なものねえ。」

「うるさいよこの方角コンビ!!！」

やっぱりそうか。思った通りだ。

ってか、方角コンビって…まあ、確かにそうだな。笑える。

「東と南は容姿端麗・成績優秀。人望も厚いしスポーツもできる。

織人は成績最悪・ルックス微妙。唯一言えるのはスポーツ万能だろ？」

…お前この輪から抜けるよ」

「ほっとけ!!！」

「ホントよねえ。幼馴染みの特権使いすぎよ。

皆アンタのこと寄生虫って言ってたわよ」

「僕ってそんなに邪魔ツスか!？」

「…2人ともいい加減にしろ」

「あ、東…」

そうだな、さすがにちよつと言い過ぎたかな。

ちよつとだけな。

「そんなに事実を次々と突き付けたら可愛そうだろ？」

コイツが1番毒だった!!！」

「う、うわあああああああああああああああああ…」

「…ほら見る」

いや東。お前のせいだから。

「どうする？ほっとく？」

「いや…あれで学校に来なくなって明日からイジる人間がいなくなつたらつまらないから追いかけてようぜ」

「それもそうね」

「…お前ら。まずイジるのを辞めないか？」

こうして高校生活初日は終わった。

第三話 東西南北（後書き）

J:

第1回登場人物とのトークコーナー!!

僕がお気に入りユーザーに登録させていただいている風の音さんのコーナーをやらせていただきたいと思います!!

記念すべき第1回のゲストは名イジられ役、織人くんです!!

織:

イジられ役ってなんだよ!?

J:

え?だってそうでしょ?

君のお友達が、織人君はDMだからそう言う役になったって言うてただけど…

織:

それ絶対南だよね!?

J:

いや、東君だけど…

織:

………

J:

あ、他の友達にも聞いたところ、

「え?アタシと織人って友達なの!?

主人と下僕だと思ってたわあ。」

って言うてたよ。

よかったね!!

織:

よかないわ!!

くそう、なんで皆こんなに冷たいんだよあ…

J:

安心してくれ織人クン!!

僕は君の味方だから。

織：

JUNPEIさん…

J：

だから心置きなくイジられてくれ。

僕もその描写を頑張って書くから。

あ、なるべく激しくイジるように南ちゃんに言っとこうか？

織：

アンタ鬼ツスね!?

チクショウ!! 将来皆よりビッグになってやるからなあ!!

うわああああああああああああ…

J：

あゝあ、行っちゃったよ。せつかく次回予告やらせてあげようと思
ったのに。まあいいや。

次回!!

まさかの展開!? 新入生歓迎部活動紹介!!

カミングスーン!!

…あ、次の更新は3/14日の予定です。

第四話 部活動（前書き）

第三話で次回の更新は3/14と書きましたが…すみません。

今日書いちゃいました。

今回も少々会話多めなのですが、楽しんでいただけたらと思います。

あと、感想がいただければ僕はうれしいです。

書けたらでいいので…

第四話 部活動

「「新入生歓迎部活動紹介会？」」

見事に織人と八モった。

っていうか字がおかしくないか？フツー紹介「介」だろ？

俺の心を読んだかのように先生が話を続ける。

「あ、ちなみに何故“介”でなく“会”なのかは、“部活動紹介会”だと言い回しがメンドーだからだそうだ」

あ、ナルホド。

ちなみにここは学校の教室で朝のHR中である。

なんか午後は“部活動紹介会”なるものがあるらしい。

その内容はそれぞれの部活が決まった時間内にアピールをするという…まあありきたりなものだ。

「プリントを配っておくから、コレ見てある程度部活を絞るとけよ。その方が楽だぞ」

そう言い残してサツサと職員室に帰ってしまった。

あ、回ってきた。

結構いっぱい部活あるなあ…ってんん？？

あれ？あれあれ？？

サッカー男子

サッカー女子

スキー

ソフトテニス男子

ソフトテニス女子

ソフトボール

卓球男子

卓球女子

野球部

ない…ない……

バスケットボール部がなああああああああああいいい!!!

「おい織人!!!!」

「ななななんだよ!?!」

「お前、プリント見たか!?!」

「い、いや…見てないけど。」

「どうしたんだ?」

「バスケ部が…ない」

「…え?」

俺達はソッコーで職員室に駆け込んだ。

先生…先生はどこだ?

……いた!!!

「先生!!!!」

「うおお、どうしたんだ?」

ええ…と…スマン名前何だっけ?」

「…盃陣矢です」

「臺織人ツス」

…てかさろそろ覚えてくれよ。もう1週間経つじゃん。

「そうだったな。で、どうしたんだ?」

「バスケット部ってどうなったんですか!？」
「ああ、なんか…春休みに暴力事件を起こしたらしくてな、廃部になっただ。」「
もしかして入るつもりだったのか?」
「…残念だったな」

昼休み

例えるなら…糸の切れた操り人形だった。
皆が仲のよい級友達と机をくっつけ弁当を広げているなか、崩れ落ちた人形が一体。
それは俺だった。部活と言う糸が切れた…

「陣矢!？」

「どうしたのよ!？」

「南…か?」

「何があったのよ?」

「織人は奇声を発しながら廊下を疾走するし」

「ああ、あいつも同じ気持ちだったんだな。」

「お前ら…部活紹介会…の…プリント…見たか?…」
「…ああ」

「なんだ東。その目は。」「
そしてその手を退けてくれ。」「
肩に置いてくれるな。」

「見事にバスケット部が無かったな」

「うわあああああああああ!!」

その事実を突き付けるなああああああああ！！！！」

皆の視線が突き刺さる。

すみません。そんな哀れみで満ちた目で見ないで下さい。

「うん。アタシ達もビックリしたのよ。

入るつもりだったから」

「……………ただいま」

奇声を発していた珍獣が戻ってきた。

「どうした織人？」

「東か。いやね、僕気づいたら廊下にいたんだよね。

そしたら先生に病院に行ったらどうだって言われたんだ。

僕って何してたかわかる？」

「クケエエエって奇声を発しながら廊下を疾走してたわよ。」

「…恐らくバスケット部が廃部になったシヨックだろう」

「僕もそう思うよ。」

陣矢…僕達ってここに意味あるかな？」

「少なくともお前は無いな」

「お前も無いんじゃないのかよ!？」

「まあ、そんなことは置いといて」

「置いとかないで下さい!!」

「そこでアタシ達考えたのよ。」

軽音部やりましょ!!」

…今なんと？

軽音部？

「いやあ…それは無いでしょ」

「ナルホド！！それがあつた！！」

えええええ！？

納得しちやつた！！

「お前…楽器とか出来るのか！？」

「陣矢。アンタが疑うのも無理ないわ。

でもね、受験勉強ですっかりやってないけど私たちがバンドやってたのよ！！」

それは驚きだ。

「ん？ってことはもしかしてお前達と織人が仲良し3人組って言うのは…」

「そ。バンドをやっていたからよ」

なるほど。ただの幼馴染みただけってだけじゃなかったって訳か。

「そうだよ！！それがあつた！！」

あれ？でもこの学校って軽音部あつたっけ？」

「無いわよ？」

「駄目じゃん！！」

「アンタ馬鹿？無けりゃ作ればいいのよ。」

「作ればいいって簡単に言うけど、できるのか？」

「うん。先生に聞いてみたんだけどね、人数が5人いれば同窓会として活動できるらしいのよ」

「……2人足りなくねえ？」

「アンタが入れば1人よ？何か問題ある？どうせアテは無いんでしょ」

「まあそうだけど……」

「じゃ、決まり。問題は後1人ねえ……」

「他にアテは無いのか？お前ら地元だろ？」

「実はこの学校に通ってる人間で私達と同じ中学出身の人って少ないのよ。」

「ここに来る前にいろいろ当たってみたけど無理だったわ」

「そうか、じゃあどうするか？」

（キーンコーンカーンコーン）

いいタイミングでチャイムが鳴ってしまった。

「とりあえず私達は戻るわね。アンタ達もちゃんと考えといてよね。後1人どうするか」

「ああ、わかった」

そんなこんなで俺が入る部活は（ほぼ強制的にだが）決まった。新入生歓迎部活動紹介はあと1人をどうするかを考えていてほとんど聞いていなかった。

第四話 部活動（後書き）

J：
登場人物トークコーナー！！
はい、という訳で第二回。早速いつてみましょう。

今回のゲストは皆さん覚えてますかね？二話ぶりの登場陣矢君の母親。

未来さんですーすー！！

未：

わあ、ありがとう。

J：

いやあお久しぶりです。

すみませんねえ、なかなか作中にお出しすることができなくて。

未：

ううん。だいじょうぶだよ。

みんなが見てないところではあ、かずくんにいっぱいあまえられるもん。

J：

一樹さんは愛妻家ですからねえ。

僕も将来はそう言う家庭を持ちたいものですねえ。

未：

でもお、やつぱりかずくんがねえ、私のかんがえたパンを食べてくれないんだよ？

J：

そりゃああんなパンを出されちゃあねえ…あ。

未：

う…ぐすつ…ひつく…私の…考えたパンは…

おいしいもおおおおおおおおおおおおおん！！！！！！

J：

ヤバツ。泣かしちゃったよ。まあ、一樹さんに任せよう。
って言うか次回予告してもらいたかったのにまたいなくなっちゃっ
たよ。

…まあいいや。

次回！！寂れた町の一輪の花。「もしよければ私がお手伝いしまし
ようか？」

4人目の友！！

仮眠具巢運！！

次は3 / 1 4 までには更新できると思います。

第五話 4人目の仲間（前書き）

JUNPEIです。

まさか2日連続で更新できるとは思いませんでした。

今回も会話が多いですが楽しんでください。

それではどうぞ!!

第五話 4人目の仲間

「さて…どうするか…」

現在俺達は学校からの帰り道である。

部活動紹介が終わった後、何人が当たってみたが皆既に入りたい部活を決めていたらしく誰も頷いてくれなかった。

「あと1人が難しいわねえ。やっぱりもっと早く手を回しておけばよかったわ」

「…そうだな。しかし今更そんなことを言ってもしょうがないだろう？」

「それもそうだけど…ああもう！！誰か入ってくれないかしらねえ」

「あ、ねえねえ。あそこにいい感じの喫茶店があるよ？寄ってかない？」

「織人おゝ。アンタねえ。マジメに考えてるうゝ？ことと次第によつちやあ殴るわよ？」

「すみません。考えるんで笑顔で怖いこと言わないで下さい」

織人…お前ビビりすぎ。

「でも、あそこに寄るのはいいんじゃないか？

学校からも近いからもしかしたら生徒が誰かいるかもよ？」

「…まあいいわ。それも一理あるから寄っていきましょ」

(カランコロン)

「あ、いらっしやいます」

店の奥から女性定員の声が聞こえた。どっかで聞いたことがあるような気がするんだが……気のせいかな？
でもここ人少ないな。
客どころか店員もいないぞ。

「すみません。今少々手が離せないのでお好きな席に座っていてください」

「はい」

「……陣矢。お前の予想は見事に外れたな。人1人居ない」
「うるせい」

相変わらずの東の鋭い指摘が飛んでくる。

しかしホントに人がいないなあ。学校に近いし下校時間だからもつと客がいてもいいと思う。

俺達はとりあえず手頃な席に座った。

「織人。アタシカプチーノね」

「なんで僕に言うんだよ？」

「え？だってアンタのオゴリでしょ？」

「僕そんなこと一言も言っていないッス！！」

「まあまあいいじゃない。部活って言うのは主従関係……信頼関係が重要でしょ？」

そう言ったものを深めるためにも。ね？お願い」

「今主従関係って言いかけましたよね！？」

「おい織人……」

「止めてくれるな陣矢。」

今日こそハッキリと言ってやるんだ！！」

俺は親指を立てて笑顔で言った。

「俺エスプレッソな!!」

「俺達もツスか!？」

「…じゃあ俺も陣矢と同じで」

「東まで!？」

「…今更…」

見事に3人でシンクロする。

さすがに織人も可哀想に…不思議と思えない。

「ま、冗談はこの辺にしましょ」

「アンタの言葉は冗談に聞こえないんだよ!？」

「…まったく五月蠅いわねえ!!いつまでも喚いてるとホントにオゴらせるわよ!？」

「…ハイスミマセンユルシテクダサイ」

だから織人ビビりすぎ。

「すみません。お待たせしました。

ご注文はお決まりですか？」

店員がやってきた。

俺達はさっき言ったものを頼んだ。ちなみに織人は紅茶。

…でもあの店員どっかで見たことがあるような気がするんだよなあ。

「なあ陣矢?あのカワイイ店員どっかで見たことない?」

「織人もか?俺もどっかで…あ、そうだ!!」

同じクラスにいた女子じゃなかったっけ?」

「うん。そうだよね?」

「何?アンタ達知り合いなの?」

「知り合いっつーかクラスメイトだ」

「ふうん。じゃあ誘ってみましょうよ」

「何に？」

「軽音部に決まってるじゃない。」

「お待たせしました。」

タイミングよくさっきの店員が現れた。

「ねえねえちょっと」

「…はい？どうなさいました？」

「あなたも阿弥高校の生徒でしょ？」

「はい。それが…何か？」

「コイツら（俺と織人を指差し）があなたと同じクラスだって言うんだけど…」

「ああ、そうですね。確かお名前は盃陣矢さんと臺織人さんでしたよね？」

「スゲエな。よく名前なんて覚えてられるな」

「人の顔と名前はすぐに覚えられるんです。お客商売をしていますから」

そこから自己紹介タイムが始まった。

彼女の名前は澤村和海^{さわむら かすみ}。

両親を事故で亡くしてからここを1人で切り盛りしているらしい。

スゲエな…

声優なんかになったら人気者になりそうな柔らかく暖かい声をしている。

顔もかなりカワイイ。

だけど南と違って物静かな印象の残るタイプだな。

「この店和海ちゃんが1人でやってるの？」

「ええ。そうですね。両親が残した宝物なので」

「へえ〜。可愛くて気立てもよくてしつかりしてて。

誰かさんとは大違いだねえ。やつぱりモテるんじゃないの?」

「いいえ。そんなことはありませんよ」

「つて言うか織人?その誰かさんとは誰かしらねえ?」

「い、イヤだなあ。南さんのことじゃ無いですよ〜アハハハハ」

「でもこの店をやってるつてことは、さっきの話は無理なんじゃないか?」

「そうよねえ...」

「あのお。お話、とは?」

「ああ、かいつまんで話すとねえ...」

南が俺にした説明と同じような説明をする。

「そうなんですか?でしたら...私でよければお手伝いしましょうか?」

「だよなあ、店をやってるのに部活なんかできるわけがな...つてええ!?!」

「い、今なんて言ったの!?!」

「いえ、あの...私なんかでよければお手伝いしますよ?」

「でもあなた店をやらなくちゃいけないんじゃないの?」

「ここはお昼はあまり人が来ないんですよ。」

夜に常連の私のお友達が来てくださっているので、支障はありません。

「...どうですか?」

「いやあもう願ったり叶ったりよ!!コチラこそお願いするわ!!」

「ふふ...じゃあお願いしますね。私のことは下の名前で呼んでください。」

私のお友達はみなさんそうしているのだから

「わかったわ。よろしくね。和海」

「はい。こちらこそよろしくお願ひします」

帰り道

「いやあ、ほらね。あそこ寄ってよかったでしょ？」
「ま、今回だけは織人のこと素直に褒めてあげるわ」
「…よかったな。これで部活ができる」
「あ、そうだ皆。今日俺ん家に寄ってかないか？」
「え？陣矢の家に？何だよ？」
「なんか俺のかあさんが友達ができれば家に連れてきてほしいんだ
つてさ。」

ほら、俺って遠くから引越してここにきたじゃん？
だからどんな友達ができたか知りたいんだよきつと」
「アタシは別にいいわよ」
「…俺も問題ない」
「そうか、じゃあちよつと寄ってつてくれ」
「ねえねえ僕は？」
「お前はこの前来たからいいだろ？」
「いいじゃんかよ!？」
「はいはいわかったよ」
「あら織人？抜け駆けしてたの？」
「まあね。きつと2人とも陣矢の両親見たら驚くぞ？」
「「?」「」」

そりゃそうだろなあ… あんなんだもんな。

盃家前

「あら？陣矢の家ってパン屋なの？」
「ああ。息子の俺が言うのも何だがかなり美味いぞ」

かあさんが考案したパンを除いてな…

店の中に入るとおさんがレジの前で新聞を読みながらくつろいで

いた。

「ただいまー」

「「「お邪魔します」「」」

「おお、お帰り陣。ん？後ろのは友達か？」

「うん。仁志東と北原南だ」

「「「こんにちは」「」」

「おおそうかそうか。だったら、店のパンをやるう。好きなものを持って行け！！」

織人。お前も持って行っていいぞ！！」

「「「ありがとうございます」「」」

「ねえ織人。あの人ってアンタのお兄さん？」

ボソツと訊ねてきた。まあそう思うのが普通だよなあ。

「「「いや、とおさんだ」

「ええ！？だってどう見たって10代後半〜20代前半よ！？」

「あ、そうそう。言うておくが、その棚の商品だけは持っていくなよ」

とおさんが店の端っこを指差していった。そこには、

【新作！！歌舞伎揚げパン！！】

と手書きで書かれた紙をぶら下げた棚があった。

… 確実にかあさんのだな。

「？何ですか？」

「知りたいか？知りたいのか！？それはなあ…」

静かにゆっくりと立ち上がり、かあさんのパンを指差しながら高らかに言った。

「それが、未来のパンだからだああああああ！！
ふわっとした中に歌舞伎揚げの硬さが入っていて、最悪の歯ごたえ
！！
さらにパンと言う洋食のものに対し歌舞伎揚げと言う和が合うはず
がなく、食うのはかなりの覚悟が必要になるのだああああああ
あああ！！！」

泣きながら熱弁する。…とおさん、一体いくつ食べさせられたんだ？
…っであ。

「とおさん…後ろ」

「……え？」

「…つく……ひつく…」

かあさんが泣いている。ばっちり聞こえちゃったんだなあ。
頑張れとおさん。

「わ……わた……しの……パンは……た……たべるのにい……

かくごなんていらぬもおおおおおおおおおおおおん
！！！！」

「み、未来！！」

大泣きして走って行ってしまった。

「くそう…お前のパンは最高だああああああああ！！」

とおさんは例の【歌舞伎揚げパン】を口にくわえて追いかけていっ
た。

その後、かあさんが帰ってきて泣き止んだのが1時間後だった…

第五話 4人目の仲間（後書き）

J:

登場人物トークコーナー!!

はい!!というわけで早速第三回いってみましょう。

今回のゲストは陣矢君の父親。

一樹さんです。

—:

おいJUNPEI!!

J:

…はい、なんででしょう?（え?怒ってる?）

—:

おめえ前回のこのコーナーで未来を泣かせたよなあ?ああ?

J:

はい…泣かせてしまいました。

—:

いいか?世の中には言っていることと悪いことがある。

お前は悪いことを言ったんだ。わかるか?

J:

ハイ、スミマセン。

—:

わかればよろしい。

あとこれも聞きたかったんだけどなあ。

お前はほのぼのとか甘々の小説が好きだって聞いたんだがホントか?

J:

はいそうですよ。

見てて楽しいですね。

—:

なのになんでKAZOMのキーワードが“シリアス”なんだ?

おかしくねえか？おかしいよなあ？

J：

いや……あのぉ……えつとぉ……

あ、そうだ。未来さんのパンについてどう思いますか？

一：

話題すりかえてんじゃねえよ！！

……まあいい、答えてやろう。

正直言つて勘弁してほしい。

あんなマツズイパンを客に薦められるか！？

答えはNOだろ！？

心優しい近所の人しか買つてつてくれねえんだよ！！

いくら言つてもやめてくれねえしよぉ！！

しかも言つたら涙ぐむんだ！！

未：

かすくうくん。おべんと

一：

未来のパンを見るのが辛いんだよおおおおおおお！！

正直あれは人間の食べ物じゃねええええええええええ！！

J：

一樹さん……未来さん後ろにいますよ。

一：

ええ？

未：

わた……しの……パ……ン……は……

ひとのたべものだもおおおおおおおおおおおおおおん

！！

一：

くそう……

俺は大好きだああああああああああ！！

J：

まあ、たどつか行っちゃったよ。

次は確実にいなくならない人チヨイスしよう。

次回！！

5つの異なる音色！！意外な人の意外な才能！？

始動軽音部！！

カミンググースーン！！

皆さん信じないかと思いますが、次の更新は3/13くらいです。

第六話 始動軽音部（前書き）

いろいろ書こうとは思ったのですが、これ以上書いてしまうと文字数が以上に多くなってしまふので、きりがいいところで終わらせてしまいました。

なので今回は今までよりも文字数が少ないので、ご了承ください。
では、どうぞ!!

第六話 始動軽音部

「それじゃ早速第一回の部活をはじめるわよ!!」
『おおおー』

晴れて今日から正式に軽音部が始動した。
ちなみに顧問は俺達のクラスの担任である馬場先生なのだが、
< めんどくせーからほとんど顔出さねえけど面倒だけは起こすなよ。

>
とだけ言っていた。

部長は南に決定した。…まあ、言いだしっぺだしな。
そう言うわけで今日が第一回目なのだが…

「なあ南。軽音部第一回目の部活って言ったって何やんだ？」
「今日は陣矢と和海!!アンタ達の楽器を決めるわ!!」
「…え?」

完全に俺と和海の声が重なった。
そう言えばそうだよな。楽器も決まってないのに練習も何もなしな。

「2人とも何か楽器の経験はあるの?」

「俺は…リコーダーくらいしか」

「私はピアノを習っていました」

「まず陣矢は論外として、和海アンタピアノやってたんだ。
え?いつ頃からやってたの?」

「確か…4歳くらいから習っていたと思います。」

両親が他界してお店をやらなくちゃいけなくなっただけから弾いてません」

「それでも3年前でしょ？…これは即戦力になるわねえ…フッフッフ」

なぜそんなに悪そうな笑みを浮かべる？

「つてか論外って何だ！？しょうがねえだろ？スポーツ少年だったんだから。」

「じゃあ和海にはキーボードをやってもらおうかしら。それでもいい？」

「ええ構いませんよ」

「うん。じゃあよろしくね。キーボードなら私の友達から貰ったのがあるからそれを使ってね」

「はい。わかりました」

「で、問題は陣矢ねえ。どうする？カスタネットでもする？」

「シヨボツ！！え？俺にはその選択肢しかねえの？」

「もつとこう…ギターとかドラムとかさあ」

「残念。ドラムは僕なんだよねい」

織人がドラムだと？

「別にギターでも構わないわよ？ギターは2本あった方がいろいろ便利だし。」

でもアンタギター買えるの？たっかいわよ？

あ、言い忘れてたけどアタシがギターだから。東がベース」

まあ、南と東はイメージぴったりだな。

「それは心配しなくてもいいぜ？」

昨日とおさんに部活の話をしたんだけど、家にギターあったんだよ。俺のおさんも昔バンドやってたらしくてな、お古なんだけど問題

ある？」

「あら？そうだったの！？…ならギターに決定ね。お古でも問題は無いと思うわ。相当古くなければね」

「そうか、よかった」

「……なんか、すぐ終わっちゃったわね」

「……そうだな、陣矢の楽器選びにかなり時間がかかると思っていたのだが…まあいいんじゃないか？」

「そうね」

ちなみに東が副部長だ。

「んー…じゃあ今日はもう解散でいいわ」

「え？」

「うん。解散。各自家で練習ってことで。あ、和海と織人は家に来てくれない？」

キーボードとその機材とか部室に持って来るから」

「なんで僕もなんだよ！？」

「何アンタ、和海やアタシに重いもの持てっの？いい度胸じゃない」

「あの…なんで僕なんでしょうか？」

「アンタが1番使いやすいからよ。…なんか文句ある？」

「ひいっ！あ、ありません！！」

「織人、ビビリ過ぎ」

南の気迫に押されて織人はすっかりビビっている。

「じゃ、また明日ね」

「ああ、またな」

そしてすぐに帰宅した。めんどくさがるとおさんに頼み込んでギタ

ーの弾き方を教えてもらったのは言うまでもない。
だが、俺もおさんも練習に熱中しすぎてかあさんを放つたらかし
にってしまったので、かあさんが拗ねてしまい、練習時間よりもか
あさんの説得時間の方が時間がかかってしまった。

第六話 始動軽音部（後書き）

J：

登場人物トークコーナー！！

はい、と言うわけで第四回いってみましょう。

今回のゲストは主人公陣矢君です！！

陣：

よろしく。

J：

前々から聞きたかったんだけど、陣矢君は南ちゃん達と知り合った直後から下の名前で呼び始めたよね？

それはどうして？

陣：

ああ、それは南達から下の名前で呼ぶように言われたからだよ。

ま、俺自身も仲のいい友達はその下の名前で呼んでたから抵抗はないよ。

J：

なるほど。

陣：

あ、代わりに俺が質問したいんだけどいい？

J：

？うん。

陣：

前回の後書きでく意外な人の意外な才能？>って書いてあったけど、誰か才能発揮した？

J：

あ、いやあ……それは……そのう……ほら、あれだよ。

織人くんのパシリとしての才能！！

陣：

……本当のことを言え。

J:

はい、すみません。

文章書いてたらそのシーンが入れることが出来ませんでした。

陣:

ちなみに誰の才能発揮する予定だったんだ？

J:

……ひつじょーに言いにくいのですが………陣矢くんです。

陣:

お前……ひどいよ。

なんなん？お前の都合で俺は猛練習とかあさんの説得やらされたってこと？

J:

……はい、その通りでございます。

陣:

はあ、全く………次はこういうことが起きないようにしるよ？
じゃあ俺は帰るからな。

J:

はい、以後気をつけます。

うん、じゃあね………って帰しちゃダメじゃん！！

また僕が予告かあ………次こそは誰かにやらせよう。

次回！！

軌道に乗り始めた軽音部。しかし一人だけ悲しそうな瞳を……

大きな存在

カミングスーン！！

次回の更新は3/12 or 13になると思います。

注：次回から徐々にシリアス傾向が入るかもしれませぬ。

第七話 大きな存在（前書き）

どうもJUNPEIです。

今回から今までよりも物語の雰囲気が変わります。

その辺をふまえてお楽しみください。

ではどうぞー！！

第七話 大きな存在

5月。

忌々しいテスト週間も終え、学校は6月に行われる学園祭の準備に追われる生徒達で一杯となった。

かく言う俺達軽音部もライブをやるので準備に追われているのだが…

「ホンツツツツツツツツに信じらんない!!」

「すみません」

「…お前やる気あるのか？」

「ハイ…アリマス」

「お前…マジでふざけるなよ？」

「ゴメンナサイ」

なぜ皆がこんなにも織人を攻めているかと言うと…

織人が数・英・理で赤点を取り追試を受けることになったからだ。

しかもこの追試で1つでも赤点を取ると学園祭に出させてもらえないらしい。

結構シビアだな…ウチの学校。

「まあまあ、あまり攻めすぎるのもかわいそうですよ？」

「和海ちゃん…」

和海が織人に救いの手を差し伸べる。

「頑張ってください織人さん。わからないところがありましたら教えてくださいから」

「和海ちゃん…ありがとう!」

「頑張ってくださいね」

和海は優しすぎるなあ…だけど追試で赤点なんて取ってもらっちゃ
ったらマジでヤバイよなあ…
どうしようか…あ、そうだ。

「なあみんな。だったらこれから織人の勉強特訓やらないか？」

5日後

俺の案に皆が賛成し、織人を特訓すること3日。

一昨日追試を受けて今日結果が来るのだ。

ちなみに現在は部室。南が結果を読みあげる。

「数学…57点!! 英語…43点!! 理科(生物)…32点!

!」

「やったあああああああ!!」

なんとか赤点は回避した。ってか生物32点ってどんだけだよ。

「みんな…あり」

「さあ部活始めるわよ」

「僕の感謝の言葉をさえぎらないでください!!」

「うっさい!!」

「ハイ!!すみません!!」

「とにかく、このヴァカのせいで余計なタイムロスしちゃったから
急いで準備するわよ!!」

『おおー!!』

と、言うわけで他の部よりか遅く準備に入ることになってしまった。
だが、テスト前は基礎とか結構やってたから大丈夫だろう。

「じゃあ昨日届いた楽譜配るわよ」

南がネットで注文した新しい楽譜だ。文化祭で演奏するための。今回やる曲は全部で5曲。どれも有名なJ-ポップばかりだ。だがそれではつまらないということで、南が作詞し、和海が作曲してオリジナルの曲を一曲やることになった。オリジナルの曲も配られていた。…む、難しい。ちなみに俺はソロパートが多いリードギターだ。なぜ経験の浅い俺がこんな重要な役をやるのかと言うと、南がリズムギター兼ヴォーカルなのでソロをやる余裕がないからだ。

「ま、さすがに今すぐできないと思うからこれからは各自で譜読みの時間ってことで。」

『はい』

俺達はそれぞれの楽器を持って練習を始めた。

…これは相当キツイな。やっぱりリードギターは難しい……

文化祭1週間前

気がつけば文化祭までもう後1週間だ。

だが俺達は苦戦していた…

「ほら陣矢!! またそこで間違えてる!!」

「え? あ、ホントだ。」

「ああもう!! だから違うって言ってんでしょ!?!」

「え? ああ…: : : どうか!?!」

「違う!! : : : どうかよ!! : : :」

「あ、なるほど。」

「織人!! アンタちゃんとテンポキープしなさいよ!! : : :」

「ひいつ!! : : : すみません!! : : :」

俺達ではないな、俺と織人だ。特に俺。
俺も頑張っているつもりだったんだが、南からするとまだまだだっ
たらしく、次々とお叱りの言葉を頂戴する。
つてか織人つて経験者じゃなかったっけ？

「まあまあ南さん、あと1週間もあることですしそんなに目くじら
立てなくても…」

「あと“1週間しかない”よ！！こんなじゃ間に合うわけないわ
！！」

「…落ち着け南、もう昼から4時間練習しっぱなしじゃないか。
少し休憩しよう。やりすぎても効率が悪いだけだ」

「東もこんな状況でよくそんな能天気なこと言えるわね！！」

「ごめんなさい、こんな状況で。」

でも最近の南は怖いな。まるで何かに憑かれたみたいだ。
そして時々なぜだか知らないが悲しそうな眼をする。

「…だから落ち着けて」

「…こんなのじゃ笑いものになるだけよ！！」

…パンツ！！

乾いた音が部室に響いた。東が南の頬をはたいたのだ。

「…いい加減にしる南。お前は何を見ている？」

「何が言いたいのよ？」

「…陣矢は雄介とは違うんだ。」

「~~~~ツ！！」

「…陣矢に雄介を求めようとするな。」

「…うつつるさいわね！！」

そついでに残して南は部室を飛び出して行った。
俺と和海はわけがわからずただ立ち尽くしている。

「東！それは禁句だろう！？」

「…俺は事実を言ったまでだ」

「あ、あのさあ…俺らにはわけがわからないんだけど……」

織人は東を恨めしそうに見ていた。

これは何か裏がありそうだ。

「さっきおっしゃっていましたが“雄介さん”とは…故人ですね？」

「和海ちゃん…よくわかったね」

「なんとなく察することができました」

「おい織人、東。どうということだ？」

「……仕方がない。話してやろう」

「…僕、南を探してくるよ」

「…ああ、わかった」

織人は部室から出て行った。

東は遠い眼をしていて、昔を思い出しているようだ。

「…雄介はな…俺達の仲間で、

………南の恋人だった。」

第七話 大きな存在（後書き）

J:

え、今回は登場人物トークコーナーとをやるようなはっちゃけた空気ではないので僕が1人で次回予告をやらさせていただきます。次回。

2年前の事件　　ごめんね、あたしのせいだ……

心の中の彼

カミングスーン……

次回は恐らく3/14 or 15になると思います。

第八話 心の中の彼（前書き）

JUNPEIです。

今回は長くなってしまったので、一度に3話投稿することになります。

お楽しみください。

では、どうぞ。

第八話 心の中の彼

「…雄介はな…俺達の仲間で、
………南の恋人だった」

東の衝撃の一言。

今部室は静寂に飲まれている。
静けさがやけに耳に痛い…

「…そう、恋人だったんだよ。

………2年前、あんなことが起きるまでは…な
「2年前？」

「…そうだ。少し長いが聞いてくれ。

3年前俺達は阿弥中学校に入学した。

俺達 俺・南・織人は中学に入ったら、バンドを組んで文化祭
で発表しようと約束していた。

文化祭と言っても高校のような一般公開のある派手なものじゃない。
生徒とその身内の人しか入れない…まあ、芸術発表会みたいなもの
だ。

事前に申し込めばステージの上で発表ができたんだ。

でも、俺達は人数が少なすぎた。規定の人数が4人以上だったから
だ。

だから1年の時、俺達は発表をすることができなかった。

俺達は何とか残りの1人を探そうと頑張った。
けどまともなヤツはいなかった。

当時から俺らにはあのウザったいファンクラブがあったからだ。

男子は南目当て、女子は俺目当ての人間しか来ないから、もちろん
マジメに練習してくれない。

そして2年生になった直後、俺達は雄介に出会ったんだ。

はつきり言つてその時の雄介は頼りないヤツにしか思えなかった。
「なんたつてアイツは……いじめられていたんだからな」

「……………何してんのアンタ？」

「何つて…ホラ、木の上に本があるでしょ？それを取ろうと
うわあっ！！」

豪快な音を立てて少年が落ちてきた。

目の前には3メートル程の大きな木がある。

その上に本が乗ってしまったみたいだ。

東・南・織人の3人はたまたま通りかかり、必死によじ登るところ
を見つけたのだ。

だが彼もあまり木登りは上手くないらしく、すぐに落ちてしまった。

「いたたた…くそう、もう一回だ」

そう言つて登り始めるがまたすぐに落ちてしまう。

「ああもうじれつたいわねえ！！織人！！行きなさい！！」

「了解…つてなんで僕が行かなくちゃならないんだよ！！」

「アンタ運動神経“だけ”はいいんだからこんな時くらいは活躍し
なさいよ」

「だけを強調しないでください！！」

「…行くの？行かないの？」

「すみません、行かせていただきます」

そう言つて織人は木を登り始める。

ひよひよいと上がって行き、本を取って戻ってくる。

「ホラ、これでしょ？」

「すみません。ありがとうございます。2年生の方々ですよね。

僕は荒木雄介あらかぎゆうすけといます。1年生です」

「アタシは北原南。木に登ったサルが臺織人。で、こっちが仁志東」

「北原さんに臺さん、仁志さんですね。ありがとうございます。」

「じゃあ僕はこの辺で」

「…ちよつと待て荒木雄介。なぜこんな木の上に本があるんだ？」

百歩譲って窓からうっかり落としたとしても、こんな木の上に乗るはずはない」

ここは校舎の近くののだが、近くと言っても隣接しているわけではない。

うっかり落とした程度では木の枝に引っかかることはない程度には離れている。

「あ、いや……なんでもないですよ」

「…イジメだな？」

「うっ」

「…イジメなんだな？」

「そ、そんなことないですよ。ただふざけていただけです」

雄介は必死に笑顔を作っているが、それで東が引き下がるわけがない。

「…相手を言ってみろ。力になれるかもしれんぞ？」

「いや、だから大丈夫ですよ」

雄介は両手を前に出して拒否する。

「さすが。よくわかってるわね」

2人の話も終わったので、戻ってくる。

「で？どうするの？やるの、やらないの？」

「ぼ、僕なんかで大丈夫ですか？」

「大丈夫よ。って言うか人数が不足していて困っていたのよ」

「わかりました。僕なんかでよければよろしくお願いします」

そして4人での練習がスタートした。

雄介が3人とバンドを組むことは誰にも言わないようにした。

その方が当日にショックを与えられるからだ。

1週間に3回、4人は集まって練習をしていた。

雄介は結構練習していたのかかなり上手く、南達の度肝を抜いていた。

そしてあっという間に時間は過ぎ、文化祭当日になった。

南達メンバーがステージに上がった時、歓声と共に変なざわめきもあつた。

それは雄介に対するものであつた。

演奏がスタートし、終わるころにはそのざわめきは無くなっていた。あまりにも雄介が上手かったからだ。

見事、演奏は大成功した。

そして、文化祭も終わり、その帰り道…

「雄介！！よくやったな！！」

「ありがとうございます！！」

「…これも練習の賜物だな。」

「さあ、これから打ち上げパーティーと行くわよ！…」

『おおー！！！！』

意気揚々と4人は帰ろうとしていた。
そこへ、1人の男子生徒が現れた。

「荒木!!」

「た、竹内くん…」

「…知り合いか？」

「は、はい……」

「荒木、あの…その…なんだ。

お前って…結構すごかったんだな。

今まで…ごめん」

この竹内とやらがイジメをしていたみたいだ。

「ううん。別にいいよそんなこと。

あ、そうだ。これから僕達打ち上げに行くんだけど竹内くんもどう？

…仲直りの意味も含めて。皆さんいいですか？」

「はあ？」

南が間抜けな声を上げてしまった。

「ちよちよちよつと待ちなさいよ。

アンタ今までコイツにイジメられてたんでしょ？

怒ったりしないわけ？」

「怒ったりしたって何の解決にもなりませんよ？

こうやってわざわざ謝りに来てくれているんです。

それだけで十分じゃないですか。

…ダメでしょうか？」

雄介が南の顔を覗き込む。

南は顔を背けて言った。

「す、好きにすれば？」

「ありがとうございます」

南の顔が赤いのは夕陽のせいだろうか？

はたまた違う理由があるのか？

第八話 心の中の彼（後書き）

後書きは気にせず、次の話へどうぞ。

心の中の彼？（前書き）

第八話の続きです。
どうぞ。

心の中の彼？

「……………はあ……………」

ここは2年生の教室。南はなにやら物思いにふけっている。そこに雄介がやってきた。

「あ、いたいた。北原さん」

「え？ゆ、雄介じゃない。どうしたの？」

「この前借りたギターの本を返しに来ました。ありがとうございます」

「べ、別にわざわざ返しによかったのに。」

それこそ、持っけてもらっても構わなかったのよ？」

「いえ、借り物は借り物ですから。ではまた」

「ええ。またね」

教本を返して雄介は去っていった。

「……………はあ……………」

「……………どうした？やけに反応がぎこちないじゃないか？」

「え？きやああああ！！」

いいいいつからいたのよ！？」

「……………最初からだ。まあいい。悩みがあるようだったら聞くが？」

「うん……………ちょっとお願いできる？」

南と東は人気のない屋上に登った。

「……………ここならいいわね」

「……………で、悩みとやらはどうせ雄介のことだろう？」

「ええ！？ななな」

「…俺は何年お前のそばにいたいと思ってるんだ？
そのくらいの態度の違いはすぐにわかる」

「さすが幼馴染ってやつね。……そうよ。
アタシ、最近自分の気持ちがわからないのよ。以前は雄介のことが
わいい弟くらいにしか思ってたわ。」

「でも、近頃雄介の顔を見ると自分でもどうしようもないくらい
ドキドキしちゃって…」

ねえ東：「これってなんなのかな？」

「…まあ、間違いなく“恋”だな」

「やつぱり？アタシが……雄介に……ねえ」

「…ちなみに意識したのはいつ頃だ？」

「ねえ……アタたちよつと楽しんでない？」

「…ちよつとだけな。まあいいだろう？」

「まあいいわ。そうね…文化祭が終わった後に雄介の所にイジメて
たヤツが謝りに来たでしょ？」

その時……かな

「…なるほど。アイツの優しさ、器のでかさに惚れたわけだ」

「~~~~ツ！！はつきり言わないでよ！！」

「…だが、その気持ちに偽りは無いのだろう？」

「………そうよ」

「じゃあその気持ちを相手に伝えればいい。包み隠さず、素直に。」

「嫌よー！！」

「…なぜだ？」

「だって……それで今の関係が崩れるのがイヤ……」

「…なるほど。人気者の南もフラれるのが怖いかな？」

「はつきり言わないでくれる！？」

「…間違っているか？」

「間違つては……いないけど……」

「…じゃあ伝える。大丈夫だ。アイツは優しい。」

もしもフラれてもアイツは絶対にお前を避けたりはしない」
「フラれる前提みたいな言い方しないでくれない？」

そして南は雄介に告白した。
さすがに雄介も動揺していた。

だが、どうやら雄介も同じ気持ちだったらしい。
最初は感謝の気持ちだった。だがそれがどんどん大きくなっていったらしい。

2人は晴れて、カップルとなった。

噂はすぐに広まったが、2人は堂々としていた。

時間が経つにつれ、2人になる時間は増えていった。

2人は幸せだった。

-

「…そう。あいつらは幸せだったんだ。

だが幸せはそうは長く続かない。

ある日あの2人は山へハイキングへ出かけた。

その先で事故が起きた。

…少し険しい道を通っていた時、南が足を滑らせて崖から落ちそうになった。

なんとか雄介が手を引っ張って引き上げたんだが、その時に足場が崩れて雄介は崖下へ転落した。

……雄介は即死だった。

南は激しく自分を責めた。雄介の家族は事情を聞いたがすぐに南を慰めた。

“貴方のせいじゃないですよ”ってな。後は時間が解決してくれた。
南も元気を取り戻したが再びバンドをやるうとは言わなかった。
だから俺は驚いた。アイツが軽音部をやるうと言い出した時は。

おそらくアイツなりの罪滅ぼしのつもりなのだろう」

「罪滅ぼし？」

「…ああ。雄介はこの学校で軽音部をやることが夢だったんだ。近所で世話になった人がこの学校の卒業生で、軽音部をやっていたらしい。」

その人に憧れてギターを始めたと言っていた。

だからこの学校で軽音部をやりたいがっていたんだ」

「それで南さんはその雄介さんの果たせなかった夢を果たそうと？」

「…おそらくそのつもりだったのだろう。」

陣矢。はつきり言ってお前のギターはそこまで下手じゃない。

だけど比較対象が大きすぎただけだ。わかってやってくれ」

「別にいいよそんなことは。…で、南どうするんだ？」

俺が訪ねた時、織人が戻ってきた。

「…どうした？」

「ダメだよ。南が見つからない」

「…どこを探していた？」

「どこって…この学校の敷地内をくまなく」

「…ついてこい。俺には大体の予想がついている」

「え？…どこぞ？」

「俺達と雄介が始めてであった場所　　中学校の木のくだ」

東の言ったとおり、南は中学校の木下で座っていた。

俺達が近づくと南は気づいた。

「……………なによ？」

「南、戻って練習しようぜ！！」

「うるさいわね」

「…お前が何を思っているか知らんが、こんなことをやってたって

「わかってるわよ！！こんなことやっただって雄介が許してくれないくらい！！」

でもね！！こんなことでもしないとアタシの中でどんどん雄介が離れていって怖いのよ！！」

「…お前は何もわかっていない！！」

東が声を張り上げた。俺は東の張り上げた声を聞いたのは初めてだ。おそらく南・織人も初めてなのだろう。ものすごく驚いた顔をしている。

「…雄介はお前がこんなことをして喜ぶと思っっているのか！？」

「思っっていないわよ！！アタシがどんなに罪滅ぼしをしたって雄介が許してくれないことくらい」

「…それがわかっていないと言っているんだ！！」

「じゃあなんなのよ！？」

「…いつでもアイツは優しかったらろう！？」

今までアイツをイジメてきたヤツに謝られてもすぐに許していただろう！？」

「何が言いたいのよ！？」

「…お前がこんなことをしたら雄介は悲しむだけだ！！」

お前が自分のせいでお前を傷つけていると悲しむだけだ！！」

南ははつとした表情をしている。

俺達はただ黙って見ているしかない。

「…雄介にとつてあの出来事は許すも何もないんだ。

ただアイツは残った南……お前の幸せを願っているだけだ」

先程とは違ってなだめるような優しい声をしている。

南の眼には涙が溜まっている。

「でも……アタシは……」

「…まだ言うのかお前は？」

誰もお前を責めたりはしなかっただろう？

だから………いいかげんに自分を許してやれ。南

「うっ………うっ………」

南の口から嗚咽が漏れる。

眼からは大粒の涙を流して、それは夕陽を浴びてキラキラと光っている。

「アタシ……もういいのかな？……雄介から離れて……幸せになっても………」

「…ああ………もういいんだ。だからいいかげんに泣き止め」

「うん。わかった………もう後ろは振り返らないわ。」

そうよね。アタシ……雄介の1番いいところを忘れるところだったわ」

南は涙をぬぐった。

“もう迷わない”………そういいたげな決意に満ちた眼をしている……

…

心の中の彼？（後書き）

今回も、後書きを気にせず次のお話へどうぞ。

第九話 貴方からの卒業（前書き）

今回で南編は終了です。

読んでいただいた方、ありがとうございました。

かといってKANZOMが終わるわけではないのですが…

感想・批評等お待ちしております。

では、どうぞ。

第九話 貴方からの卒業

俺達は再び練習を再開した。

そこで1つの案が浮かんだ。

と言うよりも南からのお願いだ。

その内容とは…

『オリジナル曲の作り直し?』

「そ。皆には迷惑をかけると思うんだけど、アタシが雄介からちゃんと卒業できるように違う曲を作りたいの。」

「要するに雄介にささげる曲を作りたいって言うこと?」

「そう言うことなんだけど………ダメかな?」

「…俺は構わん。好きにやれ。」

「私も構いませんよ。作曲は任せてください。」

「俺もいいよ。ありったけの思いを伝えてやれよ。」

「……皆、ありがとう。」

「あのおく僕何も言っていないんですけど?」

「何?アンタ反対なの?」

「いえ、別に」

「だったらいいでしょ?」

「はい……」

そして本番がやってきた。

「今日はみんなありがとう!!」

最後の曲になりました。…この曲は2年前に死んだアタシの大事な人にささげる歌です。

聞いてください。

“ Graduation from you ”

その曲は今までの曲のような激しさは無いが、暖かさや強さに満ちていた。

南の眼からは一滴の涙がこぼれていた……

Graduation from you

作詞：北原南

作曲：澤村和海

初めてであったあの時…君はとても弱々しかった
その時私は思った　君を助けてみたいと
ホントは君は強かった。そのことに驚いた…

私のイタズラ　君を困らせた。でも君は笑った
子供は私だったかも、君の方が年下なのに
笑顔を絶やさぬ君のそばにいれてよかった
だから…私もう振り返らない…

成功収めた文化祭…君は嬉しそうだった
その時私は思った　君が大好きなんだと
君も同じ気持ちだった。そのことに驚いた…

私のイタズラ　君を困らせた。でも君は笑った
子供は私だったかも、君の方が年下なのに
笑顔を絶やさぬ君のそばにいれてよかった
だから…私もう振り返らない…

君はもう私のそばにはいない

私はそのことで自分を責めた
でも仲間の言葉で気づいたんだ
君はこんなことは望んでいない・・・

私のイタズラ　君を困らせた。でも君は笑った
子供は私だったかも、君の方が年下なのに
笑顔を絶やさぬ君のそばにいれてよかった
だから…私もう振り返らない・・・

君を忘れたわけじゃないよ
でも少し距離を置いてもいいよね？

そう…これが私の“Graduation from you”

こうして俺達の演奏は終わった。
会場には何人か泣いている人もいた。
また南に新しいファンができたんだろうな…
そしてその南と言えば……

「東、ちよつと話があるんだけど」
「…ああ、わかった」

2人は一緒に部室を出た。
残された俺達は顔を見合わせる。
そして笑い合った。
もしかして……

「東、ありがとうね」
「…何がだ？」

「アンタのお陰で雄介のことからちゃんと卒業できた。感謝してる」
「…本当に卒業できたんだな？」
「ええ。ホントよ」
「…じゃあもう言ってもよさそうだな」
「え？」
「…南、俺と付き合わないか？」
「え、えええええ！？」
「…この通り俺は感情を顔に出さないからわかってなかったと思うが…俺は前からお前のことが好きだったんだ」
「……………ズルいわよ」
「…何？」
「ズルいって言うてんのよ！！アタシから言おうとしたのに……」
「…フツ……………そうか。じゃあ返事は？」
「今の言葉を聞けばわかるでしょ！？」
「…わからないなあ」
「はあ……………ホントいい性格してるわよね」
「…お褒めの言葉ありがとう」
「……………アタシも……………アンタのことが好き……」
「…そうか。じゃあこれからもよろしくな」
「ええ、コチラこそ」
『おめでとおー……！！』
「え？ちよっ……………アンタ達聞いてたの！？和海まで！？」
「いやあもうバツチリ」
「幼馴染として、祝福するよ」
「お2人ともおめでとunggざいます」

この2人なら大丈夫だろう。
2人ともお互いのことをわかり合えているのだから……

第九話 貴方からの卒業（後書き）

今回もまことに勝手ながらトークコーナーは省かせていただきます。いかがだったでしょうか？KAZOM南編。

もう気づいている方もいるかと思いますが、これからどんどん東編、織人編、陣矢編、和海編など、ストーリーを展開していきます。長くなると思いますが、お付き合いいただければ嬉しいです。

次回以降は少し初めのほうの雰囲気を取り戻していこうかなと思っています。

“Graduation from you”は、わかっている方もいると思いますが、“貴方からの卒業”と言う意味です。

この詩を読んだ方が何か暖かいものを感じていただければなと思っています。

それでは次回予告をさせていただきます。

次回！！

番外特別編！！さあ行こう浮世の垢を落とすに！！

世界を超えた温泉旅行！！

カミングスーン！！

次回の更新は3/17or18になると思います。

特別番外編 世界を超えた温泉旅行？（前書き）

どうもJUNPEIです。

今回はKAZOMと僕が書いているもう1つの物語、“自然と科学と魔力と人間と…”（以降ASO）のコラボ企画です。どちらの物語にも全く関係の無いただの僕の遊びです。興味の無い人は見なくても大丈夫です。次回の更新までお待ちください。

3/21 or 22になると思いますので……

特別番外編 世界を超えた温泉旅行？

ここは伊保温泉。

あまり有名じゃない隠れた温泉宿だ。

陣矢達一行はここに温泉旅行に来た。

今日は他に客がいないみたいで、陣矢達の貸し切りのようになっていた。

「やっと来たぜ伊保温泉！！」

「…いい所だな」

「さすが隠れスポットって言われているだけあるわね」

KAZOMメンバーは車から出るなりはしゃぎだす。

さすがは高校生といったところか？

「しかしよくこんなところが見つかったな」

「ああ、アルスが見つけたんだ」

「俺の情報力も役に立つってことツスよ、姉さん」

「……だから姉さんはやめろ」

「景色がとてもいいですう！！」

ASOMメンバーも車から降りてきた。

コチラの面々は落ち着いている。……ユリアを除いて。

「でもJUNPEIも妙なことをするよな。」

「…いきなり手紙をよこして“同じ作者が書いてる登場人物同士仲良く旅行に行きなさい”だからな。」

さすがに驚いた」

「まあまあ、2人とも。せっかくいいところに来たんだから楽しま

ないと損だぜ？」

「ま、そツスね。アルスさん」

「…アンタの言うとおりだけどな」

そう言うことで各自部屋に荷物を置きにいく。

部屋割りは男女に分かれて1部屋ずつ。

じゃあとりあえず女性側の部屋でも……

「ねえ和海。ここって何時から温泉に入れるか知ってる？」

「24時間温泉に入れるらしいですよ。」

「へえ〜……じゃあ早速皆で行かない？」

「別に行っても構わんが……恐らくアルス辺りが覗いてくるぞ」

「大丈夫ですよシャーレさん。今日はKAZOMの皆さんとの旅行ですよ？」

きつとアルスさんもそんな時に覗きをするほど露骨にエッチじゃないですよ」

「……ま、それもそうだな。来たら来たらでポッコボコだがな」

女性陣は支度をしてサツサと温泉に向かった。

一方そのころ男性側の部屋では……

「ところが俺は露骨にエッチなのだ」

底に穴を開けた紙コップを壁に当ててアルスが盗み聞きをしていた
！！

覗く気満々だ。

「でもやばいツスよお……シャーレさんポッコボコにするって言う
てましたぜ？」

「ノンノン。覗きって言うのはなあ……スリルがあるからこそ楽し

めるのだよ」

「織人。怖いなら行かなくてもいいんだぞ？」

「陣矢が行くなら僕だつて行くさ。なめるなよ？」

「よし！！じゃあさっさと行こうぜ！！」

そして除きメンバー（アルス・陣矢・織人。以後ノゾキーズ）も支度をする。

「…お前達。風呂に行くのか？」

ネイロとチェスをしている東が訪ねた。

「ああ、そうだぜ。隊長と東もどうだい？桃源郷ってヤツを拝めるぜ？」

「……いや、俺は遠慮する」

「お前達。温泉を普通に楽しんで来い。普通にな」

『……はあ』

ネイロの意味深な発言にもあまり反応せずノゾキーズは温泉へと向かった。

場面変わってここは露天風呂。

現在シャーレ・和海・南がいる。

「はあ〜……ここは温泉は気持ちいいわ、景色はいいわで最高ね！！」

「ここの温泉ってどんな効能か知ってるか？」

「肩こりと冷え性に効くらしいですよ」

「なんだ美容とかじゃないのか……」

「シャーレさんもそう言うの気にするの？」

「私が気にしちやいけないか？」

「別にそう言う意味じゃないわよ」

「私も一応女だからな」

「でもシャーレさんそんなこと気にしなくても大丈夫ですよ。十分お綺麗です」

「そうかねえ……生傷が絶えない仕事をしているのだが……まあそんなことは置いといて……ユリア！」

「は、はいい！！」

「いつまでそんなところにいるんだ。ここは露天風呂しかないんだ。諦めて早く入って来い」

「で、でも……私露天風呂って慣れなくて……だ、大丈夫ですか？」

「大丈夫大丈夫。早く入って来い」

その後もキヤアキヤアと盛り上がり続ける女風呂。

そのころ男風呂では……

「で、アルスさんよお。どうやって覗くんだ？」

「甘く見るなよ？俺は覗きのプロだぜ？これを使うのさ」

「……電動ドリルと内視鏡？」

すっかりアルスの定番となったアイテムだ。

しかし陣矢と織人はそんなことは知らない。

「よし、行くぜー！！」

アルスは男風呂と女風呂を隔てる木の壁に電動ドリルを差し込んだ。
……しかし一向に貫通しない。

「おいおいおい、どうなってるんだ？アルスさん！！」

「ちよっと待てよ……き、木の間に鉄板が仕込んである！！」

実はこの鉄板はあらかじめ東とネイロが仕込んだものである。絶対にアルスが覗くとわかっていたからである。そしてアルスもこのことに気づいたようだ。

「くそう…どうせこれは東と隊長の仕業に違いはない」

「あの2人ならやりかねないな……」

「どうするんすか？アルスさん」

「こうなったら横から狙うぞ。ちよつと距離が遠くなるけどな」

そう言つて木の壁の横から内視鏡を通そうとするが……

「ト、トラップだと!？」

罠が作動し、内視鏡は切断されてしまった……

それと同時に女性陣が風呂から上がる声が聞こえた……

「結局覗けなかつたな……」

「アルスさん、どうします?」

「まだだ……まだ食後が残っている。

食後を狙うぞ!!」

アルスの心には静かだが、激しい熱意の炎が燃え上がっていた。しかし、それはあっけなく鎮火されることとなった。

「アルス!! お前は性懲りも無くまた覗こうとしたらどう!?」

「い、いえいえ姉さん。そんなことないッス!!」

「私の耳をごまかせると思うな!! 電動ドリルの音がまた聞こえてたんだよ!!」

「あ、あんなに盛り上がったのに聞こえるとは……さすが姉さん

「ッスね!!」

「コビ売ったって許されないんだよ!!」

シャーレの凄まじいハイキックが炸裂!!

ちなみに女性陣がアルス1人の犯行と誤認したので、陣矢と織人はホッと胸を撫で下ろしたのであった。

そしてその後ろでは東とネイロが意味あり気に軽く拳をぶつけていた。

特別番外編 世界を超えた温泉旅行？（後書き）

いかがでしたでしょうか？

かなり強引になってしまいました。特別企画はこれにて終了です。なんかASOMメンバーがKAZOMメンバーよりも目立ってしまったのが残念だと思いますが、勘弁していただければと……では次回予告をさせていただきます。

次回！！

本物の愛？偽りの愛？

愛される人

カミングスーン！！

次回更新は3/21 or 22になると思います。

第十話 執念の合コン(前書き)

今回って合コンネタらしいぞ？

じゃあ僕の活躍が期待できそうだね

それはない…

第十話 執念の合コン

汗や笑顔、涙で無事学園祭が終わり学校内も落ち着きの雰囲気を取り戻し始めた。だが、学園祭は生徒達に様々なモノを残していた。それは喜びだったり悲しみだったり嫉妬だったり……。

まあ何が言いたいかというと、俺の仲間が学園祭をきっかけにお付き合いを始め、更に他の仲間がそれに対して嫉妬をしているという。無論付き合いを始めたのは南と東だし、嫉妬しているのは織人だ。

その反動と言うか何と言うか……今日学校から帰る途中に織人はこんなことを言い始めやがった

「陣矢！合コンやるうぜー！」

いや、やるうと言われましても……。いきなりのものでわけがわからん。

「落ち着け。まずそうだった経緯だけでいいから教えろ」

「あ、ああ。わかった」

織人は今日までしつこく東・南に嫉妬の言葉をお見舞いしてきたらしい。要するに寂しかったのだとか……（東談）。毎日毎日ウダウダとうるさいので根負けした南が主催の合コンを開催することになったのだ。だが女子側を南が、男子側を織人が集めることになったらしく、それでメンバーを集めているらしい。で、あと一人だから俺ということとか。

「まあいいだろう。俺も暇だし。お前がどうしてもって言うなら出てやるよ」

「またまた〜。お兄さんも好きなくせに〜」

ニヤニヤと気持ち悪い笑みを浮かべながら俺の脇をひじで突いてくる。まるでいかがわしい店の客引きみたいだ。

「あっそ。じゃあ俺はいいわ。じゃな」

「ごめんなさい来て下さい……」

「大体俺じゃなくてもいいだろう？なんで俺？」

「いやあ、他に誘えるような人がいなくてさあ……………」

「お前……友達いないんだな」

「ほつとけよ！！」

あまりの情けなさっぷりに、俺は同情した。

「わかったよ」

「ありがとう！！じゃあ明日の10時にここに集合な」

「了解」

織人が俺に紙切れを渡してきた。この紙に書いてあるとある店が会場らしい。

俺は行ったことない場所だが、少々大雑把だがちゃんと地図もあるから大丈夫だろう。恐らくこれは南だな。織人がこんな細かい心遣いできるわけがない。

……………そう言えば合コンってどんな格好で行けばいいんだ？とりあえず織人に聞いてみるか。

帰宅後、俺は携帯電話を取り出し織人に電話をかけた。

『r r r r r r r r i r i r i r i r i r i r i

ガチャツツ…もしもし？』

「あ、わしじゃよわし！！」

『え？もしかして峰由おじいちゃん！？』

「そうじゃ。急にはあさんが倒れてしまったんじゃ！！すぐに手術をせねばならんのじゃが500万もかかってしまっ大変な手術のうち……………どうしても金が足りんのじゃ。」

「すまんが……………100万円ほど貸してくれんかのう……………」

『ま、待っててね！！後2時間くらいしたら親父が帰ってくるから……………そしたら親父に言っておくよ！！…』

「お前バカ？」

『…へ？』

「俺だよ。俺」

『もしかして……………陣矢？』

「そう」

『お前ふざげんなよな！！本気で心配しちまったじゃねえか！！』
まさかこんな手に引つかかるとは思わなかった。俺が即興で思い
ついた“わしわし詐欺”今度南に教えてやろう。

「まあ何事もなかったんだからいいじゃん」

『天国から電話がきたと思ったんだぞ！？すごくビックリしたんだ
！！』

コイツ…正真正銘のアホだ。

「明日さあ、お前どんな服着て行くんだ？」

『僕の話は無視ですか……？』

「早く言え、電話代がもつたいない」

『最初に余計なことを言ったのはどっちですかねえ！？』

「で？何着て行くんだ？ってかどんなの着て行ったらいいかわかん
ねえんだけど」

『お前がカッコいいと思うやつでいいじゃん』

「なめんな。俺が持っている服は全てカッコいい。お前とは天と地
ほどにな」

『あなたとても失礼ですね！？』

「で？どうすればいい？」

『う〜ん……じゃあ1番高価なのでいいじゃない？』

「1番高価なのか？」

『うん。僕も買った中で一番高いのを着て行くし』

「わかった。ありがとう。」

『じゃあまたあし』

「待て待て。まだ聞きたいことがある」

『え？何？』

「俺とお前のほかにどんなメンバーがいるんだ？」

『東』

まあ、そうだろうな。主催が南だし、彼女が出る合コンに彼氏が
出ないわけないか。

「他には？」

『それだけ』

「……は？」

『僕と、陣矢と、東』

「マジか？」

『マジ』

「それって実質人集めしたのって南だけじゃねえか」

『う……ま、まあ細かいことは気にしないで』

電話越しでもちよつと慌てているのがわかる。

「そうか、まあいいや」

『もう用はない？』

「ああ、大丈夫だ」

『そ。じゃあお休み』

「あ、そう言えばさあ、織人」

『何？』

「お前が学校で使っている机って……いや、やっぱりいいわ」

『途中まで言つてやめるなよ！！』ってか怖いよ！！陣矢もしかして

僕が使つてる机が　ブチッ

めんどくさいから電話を切った。恐らく今頃アイツは家で一人悶

絶しているだろう。

そんなことはどうでもいい。明日着て行く服をどうするか……。

1番高価な服か……なら、これにしよう。

明日、皆の反応が楽しみだぜ！！

次の日

俺は走っていた。このままでは何とか間に合いそうだが南は待たされるのが大嫌いなため、あいつより遅く来ると愚痴を言われる。だから急がねば。

家から徒歩で30分程の道のりを走って10分。ようやくみんな

の姿が見えた。1 / 2 / 3 . . . 5人　　つまり俺以外がすでにそこにいた。

「すまん!!寝坊した!!」

俺が頭を下げながら近づくと、何やら冷たい目で皆が俺を見てくる。確かに遅くなつたのは悪かった。だが、間に合つたのだからそんな目で見ることはないだろう？

「ええと……どちら様？」

「いや、俺だよ俺!!」

俺はかぶっているものを外し、自分の顔を指差す。

「陣矢だよ!!」

『ええええ~~~~!!』

「何だその目は？俺は織人に言われた通りのものを着てきたというのに……」

「織人!？」

「は、はい!!?」

南が織人に詰め寄る。

「アンタ何をアイツに吹き込んだのよ!？」

「僕は1番高価な服を着てくれれば?って言っただけだよ!!」

「だからこれが1番高い服だって」

「陣矢……確かにこれは高いと思うわ。でも……なんで着ぐるみなのよ!?!？」

俺が着てきた服。それはネズミとも猫とも解釈できる可愛らしい着ぐるみだ。

「いや……だって1番高価だから」

「常識で考えなさいよ!!合コンに着ぐるみで来る人間がいる!？」

「ここにいないじゃん」

「アンタ以外ですよ!!それじゃあ織人と同じくらい常識外れよ」

「それは困る……」

「南!!どう言う意味だよ!?!陣矢も本気で落ち込まないでくれませんか!?!？」

「ふふふ……」

俺たちがいつものコントをしていると、笑い声が聞こえてきた。
今日参加する女子側の子だ。

「ごめんね。こんな変なヤツばっかで」

「ううん。とつても楽しいよ」

笑ってる子ではない方の子がそう言った。これで相手も笑いを誘って着ぐるみで着たと勘違いしてくれるだろう。俺は本気で着ぐるみで着ていいものだと思っただけ……

「ま、それならそれでいいわ。じゃあ中に入りましょう」

南がそう言うと、俺たちは店の中に入っていった。

無論、俺は完全装備だが……

「お客様、覆面や被り物。フルフェイスヘルメットでの入店は禁止させていただきますので、その被り物は取ってください」

……みんな、笑うな。

第十話 執念の合コン（後書き）

ところで陣矢。なんでアンタ着ぐるみなんて持ってんのよ？

とおさんから借りた

（（なんで持ってたんだ……？）（）

み、未来！？何作ってるんだ！？お前まさか……

うん！！新しい着ぐるみだよぉ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9505j/>

KAZOM ~ カゾム ~

2010年10月10日05時12分発行